

# 第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

中学生の部 優秀賞 受賞作品

## 浪人生の兄に物申す

東京都

東京大学教育学部附属中等教育学校

二年 本木 和

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

我が家の腫れ物、それは浪人生の兄である。彼の浪人が決まって以来、私は好きなテレビさえも清々と見させてもらえない。家族で旅行にも、外食にさえ行くことができない。おいしいおやつも兄優先。私は今の状況にとっても不満を抱いている。

私と兄は五歳違いだ。そんな私から見ても彼は幼いころからとてもお気楽な性格で、いい奴なのだがダメな奴である。受験本番一週間前に深夜まで妹の相談事を聞いている兄は優しいけれど現実が全く見えていない。浪人している今、今度はちゃんと現実が見えているのか、とても心配だ。親もとても心配しているようだが、本人に直接言わない。そして悲しいことになぜかすべてのしわ寄せが私に来る。非常に理不尽だ。そして、予備校から帰ってくるとなぜかいつも不機嫌で態度が悪い。家族みんなが気を使っている。一日しつかり勉強してきて疲れているのならまだ納得しようもあるが、幼い頃から彼のことを見てきている私からすれば信頼しがたい。

そんな兄にもいいところはある。普通高校生にもなると親や兄弟との接し方が変わってあまり会話がなくなると思うけれど、私には未だに「一緒にサッカーしに行こう。」などと友達のように接してくれたりと、学校のことを楽しそうに話してくれる。私にとってはどんなにパソコンでも自慢の兄である。だがこれを母に言わせればただの現実逃避だそう。母の言うことは十分理解できる。だが、心のどこかで兄を信じてあげたいという気持ちもある。なんといつても、同じ環境で育った唯一の存在、大事な存在だ。私が覚えている中で一番古い兄との思い出は、私が四歳くらいの時、兄と二段ベッドの上下で寝る前に歌を歌ったことだ。唯一の兄のとりえは歌がうまいことだ。当時合唱団に通っていただけあって歌唱力だけはピカイチなのだ。私の歌にうまくハマってくれていつまでも二人して大声で歌っていた。今でも彼にとつて歌は一番の息抜きのように、毎晩お風呂で熱唱している。私はその歌声は彼の体調と機嫌のバロメーターだと思っていて、寝ながらそれを聞くことが多く、彼らしい歌声だと安心して眠れる。きつと彼なりのストレス解消法になっているのだろう。でも頼むから今、今だけは、真面目に勉強だけをしてほしい。我が家の平穏な日々のために。

そんな彼に羨むポイントがいくつもある。並外れた鈍感力と常にポジティブシンキングな姿勢だ。私は彼とは逆でかなりの慎重派で悪い結果を想像して消極的になってしまっている。だから彼のラフな姿勢に少しうらやましい感情を抱くことがある。何事も深く考えすぎない方が案外人生うまくいくのかもしれないとさえ思うほどだ。私もその点は少しだけ見習いたいと思う。

ここまで散々こき下ろしてきたけれど、愛あるエールだと思っしてほしい。最後はびしっと決めてくれると信じている。世界で一番応援しているよ。頑張っ。